

アメリカの心理学者キャロル・S・ドゥエックによると、人間の信念にはおおきく二通りの心の在り方(マインドセット)があるそうです。「硬直マインドセット(fixed mindset)」と「しなやかマインドセット(growth mindset)」です。

硬直マインドセットとは、「人間の能力は生まれつき決まっていますと変えることはできない」と信じ込んでいる心で、しなやかマインドセットは、「人間の基本的資質は努力しだいで伸ばすことができる」というしなやかな心の持ち方です。

ドゥエックは、子どもに様々なスキルや知識を身に付けさせ、なんでも出来るようになることを求めるよりも、子ども自身が「やればできる！」と思えるようになること、難しそうに見えることでも、自ら挑戦しようとする「意欲」を子どもの心に育てておくことの方が大切だということを述べています。

ドゥエックは実験によって「能力をほめると生徒の知能が下がり、努力をほめると生徒の知能が上がる」ということを明らかにしています。

ほぼ同じ成績の子どもたちを2グループに分け、片方のグループは、「8問正解よ、よくできたわ。頭がいいわね」と“能力”をほめ、もう片方のグループは、「8問正解よ、よくできたわ。がんばったわね」と“努力”をほめるようにしました。その結果、

“能力”をほめられた子どもたちは、新しい問題に取り組むことを避けるようになっていき、“努力”をほめられた子どもたちは、積極的に新しい問題に取り組むようになっていったそうです。

そして、次に全員になかなか解けない難問を出すと、

“能力”をほめられた子たちは、「自分は頭が良くない」と思うようになり、“努力”をほめられた子たちは、「もっと頑張らなくては」と思うようになったとのこと。

しかも、努力をほめられた子たちは、解けないことを失敗と思ったりせず、「自分の頭が悪い」などとは、考えもしなかったそうです。さらに、

“能力”をほめられた子たちは、難しい問題を解くことを「おもしろくない」と答える子が多かったのに対し、“努力”をほめられた子たちは、「むしろ難しい問題の方がおもしろい」と答える子が多かったのだそうです。

その後、“能力”をほめられた子たちは、著しく成績が落ち、やさしい問題が出されても回復しなかったのに対し、“努力”をほめられた子たちの成績はどんどん良くなり、再びやさしい問題が出されたときには、すらすら解けるようになっていたのだそうです。

このように、ほめかたによっては、意欲のある子に育つどころか、逆効果になってしまうこともあるので注意が必要です。

子どもの意欲を育てるためには、成績や結果、能力に目をむけるのではなく、その子のおこなってきたプロセスや努力に目を向けることの方が重要であることがわかります。

遊びのなかで子どもたちは「あれができるようになりたい！」とか、「もっとうまくなりたい」「おもしろい！」「くやしい！」「よし、こんどは負けたくないぞ」などなど、いろいろなことを感じ、挑戦する機会がたくさんあります。友だちと張り合ったり、もっとうまくなりたいと思い、自分の意志で粘り強くがんばって、出来るようになっていく。こうした体験を多く持っている子ほど「ぼくはやればできるんだ！」という自信、意欲を持った子どもになります。大人はそうした頑張っている姿や努力を大いに認めてあげたいものですね。

将来困ることの無いようにと、就学前から塾に通わせたり、文字教育や算数教室など、いわゆる「早期教育」的なことをさせておかないと心配…という風潮が社会には渦巻いていますが、子ども自身の「自信」や「意欲」が育っていなければ、後が続きません。ちょっとの困難にぶつかって挫折してしまうようでは、「あと伸び」は期待できないのです。

就学前の「今」は、「思いっきり遊び込むこと」のほうが大切です。いろいろなことに興味を示し、チャレンジし、粘り強くがんばる。そうすることで、「困難に立ち向かう力」、「工夫する力」、「先へ進むとする意欲」など「僕はやればできる力を持っている！」と思えるしなやかな心構えが育つのです。